

第8節「幼児・児童における未来型能力システム ならびに指導者教育システムの開発」に向けて（その1）

－入学前教育と授業での実践報告－

藤後悦子・磯友輝子・坪井寿子・坂元昂

（東京未来大学こども心理学部）

要約

本節では、「幼児・児童における未来型能力システムならびに指導者教育システムの開発」に向けて、本学の学士力と学生の養成システムとの関連に焦点を当て、「入学前」教育と3年生対象専門科目において、第3章第1節、第2節、第3節から得られた実験結果を基に授業を構成し実践した。

授業後の学生の感想としては、「もっと絵本のことについて勉強したい」というコメントが多く示され、幼児教育を専門とする本学が目指す学士力の「汎用的スキル」の「目標を設定して進んで取り組む態度」が向上し、一定の効果を示したことが確認できた。

キーワード

学士力、入学前教育、汎用的スキル

1. 問題と目的

本章では、第1節から第7節までの幼児・児童における認知・コミュニケーションの発達について、実験結果を基に述べてきた。これらの結果を踏まえ、幼児・児童の認知・コミュニケーションを促す指導者教育システムの構築を目指した場合、子どもの能力を育成することを専門とする立場の人と、日常的な関わりの中で子どもの能力を引き出す人を対象とした2つの方向性について考えることができる。前者は、養成段階を経て、保育者・教員・子どもに関わる専門職へとキャリアをつなげる専門職としての立場である。後者は、子育てという営みを主とする親や子育て経験を基盤として地域の大人や地域のボランティアとして関わる立場であり、これらの関係を示したのが Figure1 である。子どもに関わる専門職の資質向上に向けて、文部科学省は平成13年に「幼稚園教員の資質向上に関する調査研究協力会議」を立ち上げ、平成14年6月24日に「幼稚園教員の資質向上に関する調査研究協力者会議報告書『幼稚園教員の資質向上について－自ら学ぶ幼稚園教員のために－』」を作成した。報告書では、幼稚園教員の養成・採用・研修の連携システムの必要性が指摘されており、それぞれの段階に応じた研修システムに大学がどのように関わっていくことができるかが検討されている。

本節では、「幼児・児童における未来型能力システムならびに指導者教育システムの開発」に向けた試みとして、第3章第1節～第7節までで得られた実験結果を基に、学生を対象に入学前教育を実施した実践、および3年生対象の心理の専門科目である「子育てカンファレンス」で行った実践を報告し、今後養成課程で目指す研修システムに向けての示唆を得ることとする。



Figure1 幼児・児童における未来型能力を育成する指導者の養成システム

さて、子どもに関わる専門職を養成するためには、卒業後に身につけるべき能力目標を示しながら、教育内容や教育効果を検討することが求められる。近年大学を卒業する際、身につけておくことが求められる能力として「学士力」が提示されている。文部科学省（2009）は、中央教育審議会大学分科会で「学士力」という概念を検討しており、我が国の学士課程教育が目指す「学習成果」についての参考指針を示した。学士力は、1. 知識・理解、2. 汎用的技能、3. 態度・志向性、4. 統合的な学習経験と創造的思考力に分類されている。さらに 1. 知識・理解では、（1）多文化・異文化に関する知識の理解、（2）人類の文化、社会と自然に関する知識の理解、2. 汎用的技能では、（1）コミュニケーション・スキル、（2）数量的スキル、（3）情報リテラシー、（4）論理的思考力、（5）問題解決力、3. 態度・志向性では、（1）自己管理能力、（2）チームワーク、リーダーシップ、（3）倫理観、（4）市民としての社会的責任、（5）生涯学習力に細分化されている。

しかし、これらの学士力は主に一般的な学部を想定した能力形成であり、幼児教育者にはさらに独自の学士力が求められる。そこで本大学では、Table1, 2 に示す通り、幼児教育者育成を目指して独自の学士力を策定した。こども心理学部の汎用的スキルとしては、A. コミュニケーションの力、協働する力（社会性）、B. 社会の一員として責任ある行動をする力（市民性）、C. 自分達の文化、異文化を理解し認める力（受容性）、D. 自分を統べる力（倫理観）、E. 常に学び、向上を続ける態度（生涯学習力）、F. 情報収集—分析—解釈—表現する力（課題を解決する力）、G 創造し表現する力（創造力）に分類された。また、専門的指導力としては、I. 専門的指導基礎力、II. 計画・立案力、III. 指導・実践力、IV. 評価・改善力、V. 情報活用力とした。

Table 1 汎用的スキル

社会と関わって活きる能力		自分自身が身に付けるべき資質			
A: コミュニケーションの力、協働する力(社会性)	1	自分の気持ちや意見をわかりやすく伝える	D: 自己を統べる力(倫理観)	11	自らを律して行動できる
	2	相手の気持ちや意見を丁寧に聴く		12	状況や変化に対応して、沈着に適正な行動ができる
	3	多様なデジタル環境やメディアを使って、仲間、専門家、他人と関わり、協働し、表現できる	E: 常に学び、向上を続ける態度(生涯学習力)	13	卒業後も自律・自立して学習できる
	4	他者と協調・協働して行動できる		14	目的を設定し進んで取り組む
	5	他者に方向性を示し、目標の実現のために動員できる	F: 情報収集-分析-解釈-表現-発信する力(課題を解決する力)	15	問題を発見し、必要な情報を収集・分析・整理し、解決できる
	6	自分と周囲の人々や物事の関係性を理解する		16	獲得した知識・技能・態度等を総合的に活用し、課題に適用し、解決する
B: 社会の一員として責任ある行動をする力(市民性)	7	自己の良心及び法規範・社会のルールに従って行動できる		17	情報を構造化し、分析し、評価し、統合し、論理的に活用する
	8	社会の発展のために、義務と権利を適正に行使しつつ、積極的に関与できる	G 創造し表現する力(創造力)	18	自然や社会的現象について可視化できる
C: 自分達の文化、異文化を理解し認める力(受容性)	9	家族や学校、社会の価値観や規範を理解し、自らの価値観・文化を育む		19	情報や知識を多角的、論理的に分析し、表現できる
	10	意見の違いや立場の違いを理解し、受け入れる	20	既存知識を活用して新しい価値(アイデア、生産物、手順等)を生み出す	

Table 2 専門的指導力

I	専門的指導基礎力
	次の各項目について、計画・立案・指導・実践・評価・改善をする能力を育てる。
1	学びの主体性を育む指導
2	問題解決力をはぐくむ指導
3	体験的な学びを取り入れる指導
4	常に自己改善を目指し自らの指導力を高める活動
II	計画・立案力
	次の各項目について、計画・立案をする能力を育てる。
1	子どもの視座に立った、計画・立案をする。
2	多くの情報源から、有効な情報を見つけ、計画・立案に活用する。
3	他者と協働して計画・立案する。
III	指導・実践力
	次の各項目について、指導・実践する能力を育てる。
1	一人一人の能力を伸ばす。
2	子どもの学びの工夫を促す。
3	学習目的に合った適切な規範を示す。
4	子ども同士の学び合いを促す。
5	実践を通して自らの指導力を高める。
IV	評価・改善力
	次の項目について、評価・改善する能力を育てる。
1	指導目標に応じた多様で適切な評価を行う。
2	自己評価かつ他者評価を基にして、学習指導法の改善を図る。
V	情報活用能力
	次の各項目について、学習環境を整備する能力を育てる。
1	多面的かつ適切な情報を活用して、よりよい学習環境を整える。
2	さまざまな立場の方々と結ぶネットワークコミュニケーション環境を整える。
3	新しいメディアを用いて、指導に係る最新の情報を指導者間で共有する。
4	情報倫理を尊重し、適切な対応をする。

このように幼児教育に特化した学士力を形成するためには、養成段階の入口ともいえる入学前教育が重要であり、またその内容も現代の幼児の姿を踏まえたものが求められる。さらに、専門科目としては、より学生主体の授業展開が期待される。

そこで、本節では、実践1として大学の入学前教育、実践2として3年生の専門科目の授業を取り上げ、授業実践を行った。

2. 実践1：大学の入学前教育での授業実践

(1) 入学前教育の実施

- ①実施時期：2010年2月21日
- ②時間：午前10時30分～11時30分，午後1時00分～2時00分
- ③担当：午前 磯友輝子，午後 藤後悦子
- ④受講人数：本学入学を予定している高校3年生130名（午前64人，午後66人）
- ⑤自由記述：授業後に自由記述を実施した。

(2) 入学前教育の授業構成

①授業内容（午前）：子どもの認知能力を探る（Table 3）

ねらい：子どもの自己認知能力の発達に関しての数々の先行研究を知り，研究手法にも触れる。また，実験結果を基にして，子どもの自己認知が時代によってどのように変化し，その理由が何かを考えさせる。

②授業内容（午後）：絵本とビデオ絵本における幼児の物語理解の違い（Table 4）

ねらい：絵本とビデオ絵本を実際に視聴し，これらの教材が与える幼児の物語理解への影響について仮説をたてる。その後，実験結果を説明し，日常場面で生じる疑問をどのように実証していくかの説明を行う。

Table 3 入学前教育授業構成（子どもの認知能力を探る）

	時間	内容	留意点
導入	10分	<ul style="list-style-type: none"> ・講師の自己紹介 ・講義で扱うキーワードの紹介 ・自分自身の「自己概念」を考えさせる課題（「私は_____」に続く言葉を思いつく限り挙げる）を行い，発表させる。 	人それぞれ自己概念が異なること，多様な自己概念を形成するためには，「自己」を認識する力が重要であることを考えさせる。
展開①	10分	<ul style="list-style-type: none"> ・自己認知が何歳から可能か予想させるクイズをC-Learningを用いて実施し，その場で全体の回答を共有する。 ・自己認知の発達プロセスについて，先行研究を基にして紹介する。 ・鏡，写真，ビデオの中の「自己」を認知するには，発達に相違があることを説明する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・実際に「何歳から自己認知できるか」を考えさせる ・心理学における「実験」の行い方がわかるように説明する。
展開②	10分	<ul style="list-style-type: none"> ・本報告の基になる先行研究の紹介 ・内閣府の調査結果を参考に，科学の進歩によって自己認知にも変容が起きている可能性を疑問として投げかける。 	
展開③	15分	<ul style="list-style-type: none"> ・実験計画の紹介 ・結果の予想をC-Learningを用いて実施し，その場で全体の回答を共有する。 ・実験結果と考察を説明する。 ・当初の予想とは異なる実験の結果について，その理由を授業終了後にレポートとして記述させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・展開①②で得られた情報を基にして，客観的，論理的に実験結果を予想させる。 ・予想とは異なる結果の理由を記述させることで，自ら考え，言葉にする能力を身につけさせる。
まとめ	5分	<ul style="list-style-type: none"> ・実験結果と入学後に学ぶ子どもの心との関連性について解説する。 	

Table 4 入学前教育授業構成（絵本とビデオ絵本）

	時間	内容	留意点
導入	10分	<ul style="list-style-type: none"> * 講師の自己紹介。臨床心理学や保育カウンセラーについての説明。 * 大学において学ぶという意味を説明する。 * 実験の組み立て方。日常的に疑問に感じるもの、先行研究を踏まえたものから仮説を組み立てることを説明。 	保育および心理の中間的な職業との保育カウンセラーに興味を持たせる
展開	30分	<ul style="list-style-type: none"> * ビデオ絵本とビデオ絵本の実験を説明する。 * ビデオ絵本の視聴および講師による絵本の読み聞かせを実演する。 * ビデオ絵本の読み聞かせの効果の違いを予想し記述する。 * 実験結果を報告する。 	実験に参加することで、実験のイメージを理解する。 記述し、発表を促す。
まとめ	5分	<ul style="list-style-type: none"> * 子どもにとってのビデオ絵本と絵本の読み聞かせの効果の違いを説明する。 	

(3) 授業を通しての感想と学士力との関連

本章第1節から第7節までの、現在の幼児を対象とした実験結果を踏まえて作成された教育カリキュラムを Table 3, Table 4 のように設定した。中でも高校3年生を対象とした入学前教育に焦点を当て、入学前教育の成果と本学の学士力を照らし合わせ検討することとした。実際に授業担当者が行った実験であったため、とても興味深く学生は授業に集中していた。ビデオ絵本と読み聞かせでは、実際に絵本の読み聞かせとビデオ絵本の視聴を行い、その違いを踏まえ自由記述を求めた。その結果、学士力の汎用的スキルの目標を設定して進んで取り組む態度（コメント例：「もっと絵本のことについて勉強したい」、および専門的指導力の「子どもの視座になった、計画・立案する」（コメント例：ビデオは興味がわくと思ったが、コミュニケーションを重視したら読み聞かせの方を取り入れたい）などの成果が示された。もちろん、入学前ということで学びへのモチベーションは高いことが想定されるが、少なくとも学ぶ姿勢を高めることができたことは意義がある。

今回の教材は、実験場面の様子が動画で示されたこと、実験の様子を再体験できたこと、さらにそれに理論的な意味付けを行うことで、より学術的な学びへの興味が高まったと考えられる。

3. 実践2：3年次専門科目「子育てカンファレンス」の授業での実践

(1) 3年次専門科目「子育てカンファレンス」での実施

- ①授業時期：2010年秋学期
- ②時間：午前8時50分～10時20分
- ③担当：藤後悦子
- ④受講人数：53人

第3章 未来型のこどもの対人認知・コミュニケーション能力と促進法

⑤授業形態：専門科目/演習/3年対象

(2) 授業のシラバスと学生の反応

①シラバス

15回ある授業の中で、前節までの実験結果を中心に作成された学研の「こどもがみ・え・る」(坂元ら, 2010)を教材とした授業を1~3回で実施した。シラバスの内容は下記の通りである。

1回目：子どもの居場所についての説明 (Figure 2 を利用)

2回目：大学の周りで「子どもの居場所」を実際に探し、写真にとる。

3回目：(1) 今の子ども、学生の子どもの時代、昭和30年代の子どもの遊び場を比較し、検討する (Figure 3 を参照)。

(2) 今の子どもたちの遊びを保障する方法は何かを検討する。

①自然スペース	自然スペースの中で魚をとり、虫をとり、泳ぎ、木に登り、ぶら下がり、隠れ家を作り、土手を滑り降り、洞穴に潜る。そういう空間の中で、子どもたちは生命の重さを学ぶ。	山、川、田畑、水路、森、雑木林など
②オープンスペース	オープンスペースの中で子どもたちは走り回り、鬼ごっこやボールを使ったゲーム、陣取り、縄跳び、野球をする。そういうゲームの場は広がりのある空間である。	グラウンド、広場、空地、野球場、原っぱなど。
③道スペース	道は子供たちの出会いの空間であり、いろいろな遊びの拠点を連携するネットワークの遊び空間である。	道路、路地など。
④アナーキースペース	廃材置場や工事場のような混乱に満ちた空間である。このような空間での遊びは追跡、格闘などのワイルドなものが多い。子どもたちの想像力を刺激する。	焼跡、城跡、工事場、材料置場など。
⑤アジトスペース	親や先生、大人に隠れてつくる子どもたちの秘密基地をアジトスペースと呼ぶ。子どもたちの共同体としての意識を育み、友情と思いやりだけでなく、ある時には裏切りや暴力をも体験させる。	山小屋、洞窟、馬小屋など。
⑥遊具スペース	児童公園の建設とともに増えている。遊びが集約的であること、遊び場の象徴性を持っていることから、今後も無視できないスペースである。	児童遊園、遊具公園など。

Figure 2 子どもに必要なスペース



Figure 3 今と昔の遊びの比較

②学生の感想

授業を通した学生の感想のエピソードを記載する。はじめに、子どもの遊び場を比較して気づいた点としては、遊びの種類や遊びの空間の狭さなどを指摘するコメントが多かった。

- ・今の子どもはゲームをやるので、家で遊ぶことが多いが、私が子どものときは、友達と外で遊ぶことが多かった。
- ・今の子どもは室内でいることが多い。自分の小さい頃は、よく外に出て遊具を使ったり、自然のものを使って遊んでいたようにう。
- ・公園で遊ぶ子どもが減っていて、デパートやゲームセンターなど大人がいるところで遊ぶようになっていく。
- ・普段何気なく見ている景色も、小さい子の目線になってみることで全く違うんだなと気付いた。信号待ちの自転車とか全然考えたことがなかったけど、いざ子どもの目線に立ってみると、怖いんだということに気付いた。子どもは目線が低いというだけではなく、発想が豊かであると思った。子どもと同じ目線でものを見て共感してあげることが大切。

次に、子どもの居場所を保障することとして何が必要かを検討した結果、下記のエピソードが示され、安全性、公園の必要性、コミュニケーションの必要性、地域復活、親の重要性などに関するコメントが示された。

- ・安全であるべき。
- ・いじめられている子には、相談できる場所、「いじめられることのない場所」がないといけない。子どもの意見に耳を傾け、きちんと向き合うことが大切。
- ・親の力が必要。だめなことはだめと教える。親の教育が必要。
- ・公園を存続させること。
- ・子どもの居場所は、地域や友人の協力が必要。親子のコミュニケーションや行事など、子どもが参加できる場を広げていく。
- ・バーチャルな世界ではなく、関係のかけ橋をつくっていくことが必要。現実に関心を向けさせる。
- ・学校に6つのスペースを用意する。
- ・親が相談できる場所を確保する。
- ・周囲の大人が子どもを守ることが必要。
- ・社会づき合いや近所つきあいも大切。
- ・両親が子どもを大切にすること。

(3) 学士力との関連

専門科目では、学士力の汎用的スキルの A. コミュニケーションの力、協働する力、B. 社会の一員として責任ある行動をする力（市民性）、F. 情報収集—分析—解釈—表現する力（課題を解決する力）、G. 創造し表現する力（創造力）に関連する効果が得られた。

まず、A. コミュニケーションの力では、グループで協力して街を散策しながら、子どもたち

第3章 未来型のこどもの対人認知・コミュニケーション能力と促進法

の居場所を探すこと、またそれを分類し、学生の子ども時代と比較することなどの作業を通してコミュニケーション力が向上したと考えられる。次にB. 社会の一員として責任ある行動をする力、G. 創造し表現する力に関しては、グループワークの一つとして「もしあなたが区長だったら、子どもの居場所を保障するために、どのような街をつくるか」というテーマで、それぞれが想像し、市民としてどのようなニーズがありどのような街づくりを展開しないといけないかということを検討していったプロセスを通して市民性や創造力を高めたと考えられる。

また、Fの情報収集—分析—解釈—表現する力に関しては、街というフィールドワークを通して情報を収集し、分析し、それを解釈し、発表するという一連の流れを通して向上できたと考えられる。

4. まとめ

本節では、「幼児・児童における未来型能力システムならびに指導者教育システムの開発」に向けて、関連および前節までの実験結果を基に授業を実施し、その効果を本学の学士力との関連で検討した。今回の実践は、「幼児・児童における未来型能力システムならびに指導者教育システムの開発」に向けての第一歩として位置づけ、今後はそれぞれの章から得られた結果を授業と関連付けて、それがどのように学士力と関連するか、またその学士力の向上に向けての各授業の連携などが求められるものである。

5. 引用文献

- 文部科学省 (2002). 平成14年6月24日に「幼稚園教員の資質向上に関する調査研究協力者会議報告書『幼稚園教員の資質向上について —自ら学ぶ幼稚園教員のために—』」の報告書 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/019/toushin/020602.htm (平成22年11月3日)
- 文部科学省 (2009). 「学士課程教育の構築に向けて」中央教育審議会答申の概要 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/siryo/attach/1247211.htm (平成22年11月3日)
- 坂元昂 (2010). こどもがみ・え・る 学研教育出版
- 仙田満 (1992). 子どもあそび—環境建築家の眼 岩波書店